

17世紀中期ヨーロッパにおける知の連関の一局面

——教育思想の形成基盤としての啓発の共同体——

相 馬 伸 一

(受付 2000 年 5 月 10 日)

本 稿 の 課 題

ヨーロッパ17世紀は、一般に、ベーコン (Francis Bacon)、デカルト (René Descartes)、ニュートン (Issac Newton)、ロック (John Locke) 等の大思想家を生んだ科学革命の世紀と見なされている。しかしながら、彼らの思想的営為は、単なる書齋の黙考ではなかった。彼らの思想活動を取りもった知識人共同体が少なからぬ役割を果たしていたのである。たとえば、デカルトの文通を仲介したメルセンヌ (Marin Mersenne) によるパリのサロン、アンドレーエ (Johann V. Andreae) らによると見なされるドイツ・ファルツを中心としたバラ十字運動、ハートリブ (Samuel Hartlib) を中心にロンドンを拠点に活動したサークル等があげられる。これらの知識人共同体は、社会に一定のインパクトを与えたゆえに、一時的に公的な資金援助を受けたこともあった。その意味では、なかば公的な存在である。しかしながら、それらは、既成の大学のように公認され恒常的な機関として維持されていたわけではない。またそれらは、そもそも個人の発意によって設けられている。その意味では、私的で自発的な運動なのである。ゆえに、これらの知識人共同体は、既存の大学等の公認の機関との対比においてインフォーマルな性格を有していた。

さて、こうした知識人共同体のうち、ハートリブのサークルは、1630年代からイギリス王政復古の直後までのおよそ30年間、すなわち17世紀中期を活動の舞台とした。ハートリブは、16世紀末に現ポーランドのエルブロンク (プロシアのエルビング) に生まれ、1628年にイングランドに渡り、

1630年以降、ロンドンを拠点に、科学的発見の情報交換、農業改革¹⁾、プロテスタント難民の救済、諸教会間の和解工作、教育改革等をめぐって、党派性や宗派性を越えた多様な人物との交流を進め、のちにここからは、王立協会の初期の有力メンバーが多数輩出した。彼らの意見交換は、刊本の閲読、手写本の回覧、書簡の往復をとおして行われ、それを現在に伝えるのがイギリス・シェフィールド大学に所蔵されているハートリブ文書である。そして、このサークルが教育史において注目されるのは、ヨーロッパ17世紀の代表的な教育思想がここを基盤に生み出されたからにほかならない。たとえば、ハートリブらの運動によるチェコの教育家コメニウス (Jan A. Comenius; Komenský) のイングランド訪問 (1641-2 年)²⁾ は、コメニウスが彼独自の学問体系である汎知学 (Pansophia) を展開する契機となり、内戦期のイングランドでは、彼の教育思想に影響されて、デュアリ (John Dury), ミルトン (John Milton), ペティ (William Petty) らの教育論が現れた。

ところで、ハートリブ・サークルの教育思想の性格を後代のロック (John Locke) などから分かつメルクマールは、「あらゆる人に (Omnes) あらゆることを (Omnia) あらゆる側面から (Omnino) 教授する」³⁾ というコメニウスの言明に代表されるその普遍主義的な性格である。ハートリブとその盟友デュアリ、そしてコメニウスはともに、当時の宗教的秩序の崩壊から政治的混迷に及ぶ総体的な規範喪失に直面して、その打開の方途を教育改革に見ていた。その際、熱烈な宗教改革者である彼らが教育思想の

1) ハートリブの農業思想については次の論考がある。

飯沼二郎、『増補 農業革命論』，未来社，1987年。

芳賀 登、『イギリス革命期の農業思想—S. ハートリブの関わった農書研究』，八朔社，1992年。

2) 太田光一，「コメニウスの教育思想の発展とイギリス訪問」，『日本の教育史学』，第31集，1988年，93-111頁。

3) Comenius, *Pampaedia*. in *De Rerum Humanarum Emendatione Consultatio Catholica* (hereafter CC), II, Academia, Praha, 1966, p. 15.

基盤に求めたのは、言うまでもなく神学であった。近代的見地からすれば、彼らのアプローチは前近代的と見なされるかもしれない。しかし、逆にそれによって、「あらゆる人」を教育の対象にとらえ、神は万知であるとの前提のうえで「あらゆること」を教育内容とすることができたのも事実である⁴⁾。これは、ロックが『教育に関する考察』(*Some Thoughts concerning Education*, 1693)を「イギリスの紳士階級にふさわしい教育論」⁵⁾として著したのと好対照を成している。ロックに限らず、ルソーが文筆をふるった18世紀後半まで、教育論の主流は家庭教育論であった。そこで想定されていた家庭とは、言うまでもなく財産と余暇に恵まれた中産上層階級であった。その意味でロックの教育は、「普遍的に人間の教育ということでもなく、イギリス国民の全体の教育ということでもない。」⁶⁾ここにロックの現実主義的な態度が見いだされる一方、そこに普遍主義的な契機は見られない。コメニウスらの普遍主義的な教育思想が、神学にその基盤を求める限りで中世的でありながら、近代に至って実現された国民皆学の理念を先どりしていたのは事実である⁷⁾。ハートリブ・サークルは、17世紀中期ヨーロッパに生み出された普遍主義的な教育思想の母胎であった。

ところで、ここでひとつの問いが生じる。ハートリブ・サークルが当時の教育思想の形成基盤であったとしても、なぜ彼らはそうした役割を担うことができたのであろうか。従来、教育思想史研究においては、主としてテキスト解釈をとおした思想内容の理解が試みられる一方、そうした思想が生み出された知的実践の様相には十分に関心が払われてこなかった。ハートリブ・サークルに即していえば、普遍主義的な教育思想が生み出されるには、彼らに特有の活動理念があったに違いないのである。事実、当時の

4) 中内敏夫、『教育思想史』、岩波書店、1998年、27－29頁。

5) J. ロック、服部知文・訳、『教育に関する考察』、岩波文庫、1967年、11頁。

6) 村井 実、『教育思想史』、上、東洋館出版社、1993年、156頁。

7) 岩崎次男、「教授学者たちの教育思想」、岩崎・志村鏡一郎・池田貞雄・編、『西洋教育思想史』、明治図書、1987年、55頁。

政治闘争や宗教対立にもかかわらず、ハートリブ・サークルには、党派や宗派を越えたさまざまな群像が集うことができた。こうした知的雰囲気は、彼らの教育思想の理念と無縁ではあり得ない。そこで本稿は、ハートリブ・サークルの活動理念を考察することを課題とする⁸⁾。

ハートリブ・サークルの活動の淵源は、1620年代末にハートリブとデュアリがエルブロンクで出会った時点にさかのぼられる。それは、彼らの活動が基本的に私的な発意に由来することを示している。しかし、それはそうとしても、彼らの活動は歴史的に何の脈絡もなく生じたものではあり得ない。彼らの活動には、何らかの範型があったと考えられる。そうした関心から注目されるのが、イギリスの文化史家イエイツ (Frances Yates) の研究である。彼女は、1610年代のドイツ・ファルツを中心としたバラ十字運動を汎ヨーロッパ的スケールからとらえ直し、同時にその性格として西洋思想において異端視されてきたヘルメス＝カバラ的伝統を強調し、ヨーロッパ17世紀思想史研究に大きなインパクトを与えた。彼女は、バラ十字運動を「挫折したルネサンス」「早すぎた啓蒙主義」⁹⁾と総括する一方、その思想はさまざまなかたちで17世紀思想に影響を及ぼしたとする。彼女はそのうちのひとつにハートリブ・サークルを見ている。

ゆえにここでは、最初にイエイツのバラ十字解釈をハートリブ・サークルとの関係で再検討する。次いで、ハートリブ・サークルの知識人共同体

8) この視点に関しては、すでに堀内 守がコメニウス汎知学の成立過程について、①17世紀初頭のラトケ (Wolfgang Ratke) らの教授学は30年戦争で打撃を受け、17世紀の30年代以降は衰退した、②汎知学の成立へのアンドレーエの役割、③知の連関を支えた「インヴィジブル・カレッジ」は成員相互の独立と共存を可能にするものであり、それが汎知学の普遍主義的な理念に高められた、という仮説を提示している。しかし、何が当時の知識人たちの「独立と共存」を可能にしたのかは具体的に明らかにされていない。また、象徴的な意味ではなく、ボイル (Robert Boyle) が言っているインヴィジブル・カレッジが当時の知の連関を支えたか否かについても検討の余地がある (堀内 守、「パンソフィアの史的一局面」、『世界教育史大系』、第11巻、講談社、1976年、316頁。)

9) F. イエイツ、山下知夫・訳、『薔薇十字の覚醒』、工作舎、1987年、53頁。

としての特質を理解するために、科学史上の論争点のひとつとなっているハートリブ・サークルと王立協会の関係に言及する。そして、ハートリブ・サークルにおけるコミュニケーションの特質を検討し、教育思想の形成基盤としての彼らの活動理念の特質を明らかにしていく。さいわいハートリブの遺稿である膨大なハートリブ文書¹⁰⁾は、近年、CD-ROM化され、それによって実証的・網羅的な研究が可能になっているので、これを分析の対象とする。

I. ハートリブ・サークルとその周辺

イエイツのバラ十字解釈とその評価

バラ十字運動とは、狭い意味においては、1614年から16年にかけて、『バラ十字の名声』(*Fama Fraternitatis*, 1614)、『バラ十字の信条告白』(*Confessio Fraternitatis*, 1615)、『化学の結婚』(*Chymische Hochzeit*, 1616)という一連のバラ十字文書が出現し、それらに対して1614年から1620年の間に200以上の賛否両論にわたる文書が出現¹¹⁾した一連の過程を指す。

三つのバラ十字文書は次のような概要である。『バラ十字の名声』は、14

10) ハートリブ文書は、およそ20,000ページの手稿と5,000ページの印刷物からなる。ハートリブの死後、その行方は長い間不明であったが、1930年代になって、ターンプル (George H. Turnbull) によって発見された。彼の研究は今もってその資料的価値を失わない (Turnbull, *Hartlib, Dury and Comenius, Gleanings from Hartlib's papers*, London, 1947. 以下, *HDC* と略記)。ターンプル以降、ウェブスター (Charles Webster) やチャプコヴァー (Dagmar Čapková) らによる同文書の研究・紹介がなされてきたが、いずれも体系的・網羅的なものではなかったため、その全貌は明らかではなく、わが国の研究者の引用も二次資料からの重引によらざるを得なかった。1992年のコメニウス生誕400年に向けて、同文書を保存するシェフィールド大学図書館は、英国学士院等の援助をもとに1987年からこの文書すべてのトランスクリプト化とデータベース化を開始した。このデータベースは1995年にCD-ROM (UMI) として出版された。以下、同文書からの引用は、*HP*の略号と文書番号・ページ番号で示す。

11) R・エディゴフェル、田中義廣・訳、『薔薇十字団』、白水社文庫クセジュ、1991年、12頁。

世紀生まれのクリスチャン・ローゼンクロイツなる人物が旅行家として東方を旅し、賢者が知識の伝授に努めている姿に接し、知の変革のための結社を組織したことが描かれる匿名の作者による物語である。そして、ローゼンクロイツは1484年に亡くなるが、1604年に発見された納骨堂には、死後120年後に十字団が公開されるとの墓碑銘があったと述べられる。これは全般的な変革の兆しであるとされた。この書は1616年までに翻訳を含めて9版された。『バラ十字の信条告白』は、1615年に再刊された『バラ十字の名声』に付随して出版され、十字団の綱領が14章にわたって述べられている。これによって謎のヴェールに包まれていた十字団は、いきおいリアリティをもってとらえられるようになった。『化学の結婚』はクリスチャン・ローゼンクロイツの自伝として著されたもので、シンボルと錬金術的記述に満ちた幻想小説である。同書の著者がアンドレーエであることは明らかとなっており、彼がバラ十字団の唱道者と見なされるのはそのためである。バラ十字団をめぐるさまざまな反応を引き起こすきっかけとなった『バラ十字の名声』の末尾には、次のような呼びかけが記されている。

「なにとぞ慎重にこの我らのお願いを熟考され、各自の技芸を正確かつ徹底的に検討され、現時代を熱心に観察されたうえで、諸兄のご高見を共同討議 (communicatio consilio) の形でなり単独でなり印刷文書にて公開して頂きたいのである。(中略) 名を名乗った者はまたどなたなりと、口頭でなり、あるいはそのほうが思慮に叶うというなら文書でなり、我等と語りあえないことはないであろう。」¹²⁾

バラ十字文書はたしかに存在し、そのインパクトは大きかった。それにもかかわらず、この団体の実態は、ドイツ・テュービンゲンを中心にバラ十字文書に近い理念を信奉する小規模の知識人共同体が存在し、アンドレーエやその周辺の学者や学生の関与が推定されはする¹³⁾ものの、それ以上の

12) J・V・アンドレーエ、種村季弘・訳、「薔薇十字の名声」、『化学の結婚』、紀伊國屋書店、1993年、211-212頁。

13) 種村季弘、「ヴァレンティン・アンドレーエと薔薇十字団」、アンドレーエ前掲 入

ことは明らかとはなっていない。さらに、バラ十字文書では魔術的・錬金術的・象徴主義的な表現が多用されていることもあって、従来の思想史研究においては異端的位置づけがなされてきた。

こうした評価を覆し、バラ十字思想に積極的な評価を与えたのがイエイツである。彼女のバラ十字解釈の特質は、第一に、バラ十字思想を神秘主義思想の一潮流であるヘルメス＝カバラ的伝統において位置づけ、バラ十字思想に至る歴史的過程の理解¹⁴⁾を試みたことにある。ヘルメス的伝統は古代のグノシス（霊知）主義にまでさかのぼることができる。グノシス主義は、バビロニアやエジプトの宗教思想とギリシア哲学とが混合したものであり、1世紀から2世紀かけてローマをはじめ中近東一帯に普及した。このうちには、幾何学の祖エウクレイデス（ユークリッド）（Eukleidēs）と同一人物とも考えられているヘルメス・トリスメギストスなる人物に帰せられる一連の文書（ヘルメス文書）が生み出された¹⁵⁾。この文書の錬金術・占星術・魔術を扱った部分は、のちのオカルト学の主要な要素となる。3世紀から6世紀にかけてエジプトに生まれた新プラトン主義も、こうした思潮と無縁ではなかった¹⁶⁾。さらに、これらの思潮とは別に、中世スペインのユダヤ人や現在のイスラエル・ゼファト（パレスティナの4大聖都市のひとつサファド）のイサク・ルリアらによって形成されたユダヤ教神秘主義のカバラがあった¹⁷⁾。この二つの思潮は、15世紀にイタリア・フィレンツェでプラトン・アカデミーを中心に復興させられ、フィチーノ（Marsilio Ficino）、ピコ（Pico della Mirandola）らの学者が、ヘルメスやカバラの原

➤ 訳書，313－327頁。

14) イエイツは、従来は異端と見なされてきたヘルメス＝カバラ的伝統を描き（*Giordano Bruno and the Hermetic Tradition*, 1964），そこにバラ十字運動を位置づけようとする。

15) イエイツ前掲訳書，295頁。

16) C・マッキントッシュ，吉村正和・訳，『薔薇十字団』，平凡社，1990年，30－36頁。

17) 前掲訳書，37頁。

理をもとに、キリスト教・ユダヤ教・イスラム教の和解の立場を求めようとした¹⁸⁾。これらは異端とされたが、秘密結社などの形をとって存続したと考えられている。イエイツは、この思想的潮流のなかに17世紀のバラ十字運動を位置づける。彼女の歴史的理解によれば、それによって「ルネサンスと啓蒙主義の間の空白」¹⁹⁾の時代が特徴づけられるのである。

第二の特質として、彼女は、バラ十字思想をドイツのプロテスタント領邦に限定するのではなく、汎ヨーロッパ的な枠組みでとらえようとする。そのスケールは、イングランド、ボヘミア、イタリアの自由都市ベネチア等にまで及んでいる。たしかにこれらの地域では、16世紀末から17世紀前半にかけて神秘主義思想が興隆しているが、彼女はそれらを人的な結びつきから横断的にとらえようとする。たとえば彼女は、イングランド・エリザベス朝の数学者で女王の占星術師であったディー (John Dee) とボヘミアとの関係²⁰⁾、バラ十字運動との関連が指摘されるハイデルベルクに修学し、のちにアンドレーエと交流をもったコメニウスの存在、汎神論的哲学を展開しローマで火刑に処せられたブルーノ (Giordano Bruno) やスコラ哲学と対立し長く獄中生活を送ったカンパネラ (Tommaso Campanella) 等のイタリアの新プラトン主義の影響等に着目した。彼女はこのうちとくに、「テムズ川とライン川の結婚」²¹⁾、すなわちファルツ首席俗選帝侯フリートリヒ V 世 (Friedrich V) とイングランド国王ジェームズ I 世 (James I) の娘エリザベス・スチュアート (Elizabeth Stuart) の結婚 (1613年 2 月) をバラ十字運動と呼応する象徴的な事件と見なし、そこから、バラ十字運動を単なる文化運動ではなく、具体的な政治基盤を志向した運動としてとらえようとする。彼女によれば、フリートリヒ V 世の擁立は、「ヘルメスの改革の理想をひとりの実在の君主を中心に実現させようという試み」²²⁾と見なされ

18) 前掲訳書, 39頁。

19) イエイツ前掲訳書, 50頁。

20) 前掲訳書, 40-64頁。

21) 前掲訳書, 28頁。

22) 前掲訳書, 135頁。

ることになる。たしかに、一連のバラ十字文書が、フリートリヒとエリザベスとの結婚に符合するかのように出現しているのは事実である。しかしながら、その期待は水泡に帰する。プラハに首都を移して君臨していた神聖ローマ皇帝ルドルフⅡ世（Rudolf II）に代わって1617年にボヘミア王位を認められたフェルディナントⅡ世（Ferdinand II）はイエズス会の薫陶を受け、プロテスタント勢力との対決を使命と見なしていた。宗教対立が激化するなか、1618年5月、プラハ・フラツチャニ城では、ボヘミア貴族たちによって二人の皇帝顧問官が窓外に投げ出されるという事件が起こり、これを機に対立は決定的となった。ボヘミア側は、プロテスタントの盟主と目されていたフリートリヒⅤ世をボヘミア王に擁立（1619年8月）。フリートリヒの即位受諾に先だってフェルディナントはボヘミア王に加えて神聖ローマ皇帝にのぼっており、両者の対立は避けがたいものとなった。そして、1620年11月、プラハ郊外のビーラー・ホラ（白山）で、フリートリヒは敗退した。これは、イエイツの図式によれば、バラ十字思想の政治基盤の崩壊を意味する。事実、1621年を境に、バラ十字関連の文書はきっぱりと姿を消してしまう²³⁾。イエイツは、ここからバラ十字思想を「挫折したルネサンス」「早すぎた啓蒙主義」²⁴⁾と位置づける。

しかし彼女は、歴史の舞台から消えてしまったかに見えるバラ十字思想は、さまざまなかたちをとって展開され、それが17世紀思想の基調となったと考える。たとえば彼女は、カンパネラの『太陽の都』（*La Città del Sole*, 1602）からアンドレーエの『クリスティアノポリス』（*Christianopolis*, 1619）、コメニウスの『世界の迷宮と魂の楽園』（*Labyrint sv ěta a r áj srcde*, 1623年執筆, 1631年刊）、ベーコンの『ニュー・アトランティス』（*New Atlantis*, 1627）を経て、ハートリブ関連で出版された、『有名なマカリヤ王国の記述』（*A Description of the Famous Kingdome of Macaria*, 1641）に至る一連のユートピア文学の連なりにバラ十字思想の継続を見ようとする。ま

23) 前掲訳書, 148頁。

24) 前掲訳書, 53頁。

た、アンドレーエが設立したキリスト教協会 (Societas Christiana)²⁵⁾ やハートリブ・サークルのようなインフォーマルな知識人共同体のうちに、バラ十字文書が呼びかけた知識人の共同討議という理念の継承を見ようとする。さらにコメニウスの汎知学については、それがイタリアのプラトン＝ヘルメス哲学者パトリッツィ (Francesco Patrizzi) の造語²⁶⁾ にならって名づけられた事実を指摘して、彼女は17世紀中期ヨーロッパにおけるこれらの一連の思想を広義のバラ十字思想と見なそうとする。そして、それらの思想の共通的性格として、マクロコスモス (大宇宙) とミクロコスモス (人間) との照応を解釈するヘルメス＝カバラ的要素を強調する²⁷⁾。

以上、イエイツのバラ十字解釈を概略的にみてきたが、彼女の歴史的パースペクティブは賛否両論を巻き起こした。彼女の見解は、哲学史・科学史のなかでも近代主義的な見地からは否定的評価を受けている²⁸⁾ 一方で、美術史や文化史においてはルネサンスからバロックに移る過渡的段階に栄えたマニエリスムの象徴主義を理解する視点として積極的に評価されている²⁹⁾。

さてここで、教育史研究においてイエイツのパースペクティブをどのように理解できるかという問題になる。ここでは、コメニウスを例にあげて

25) 前掲訳書, 217頁。

26) 前掲訳書, 242頁。

27) 前掲訳書, 147頁。

28) たとえば、ロッシ (Paolo Rossi) は、イエイツと同様に、ヨーロッパ思想に通底していた記憶術、とりわけルルス思想の影響を論じる際、その「諸民族の合理的共存のてだてと考えられる術実現を可能とするような信仰、思惟構造と实在構造との対応関係を明らかにするような普遍的方法ないし一元学の希求」が、17世紀の百科全書思想に受容されたことを認めつつも、ヘルメス＝カバラ的側面については深入りを避けている (清瀬 卓・訳、『普遍の鍵』, 国書刊行会, 1984年, 254頁。)

29) R. J. W. エヴァンズ, 中野春夫・訳、『魔術の帝国』, 平凡社, 1988年, とくに第5章以下。および T. D. カウフマン, 斉藤栄一・訳、『綺想の帝国』, 工作舎, 1995年。

みよう。コメニウスは、事物の考察にあたって「分析 (Analysis)」と「総合 (Synthesis)」の方法ばかりではなく、「類比 (Syncretism)」の方法を重視した。たとえば、『大教授学』には次のような叙述が見られる。

「自然は、その生産活動を最も内奥の部分から始める。(中略) 自然は、まず最初は、小鳥の爪や羽毛や皮膚ではなく、内臓をつくります。外側の部分は、あとから、しかるべき時期をみてつくるのです。植木職人も同じことで、接枝を、台木の外側の樹皮にただくっつけたり木質の部分の表面にさし込んだりするものではありません。台木を芯まで割ってその中に手頃な接枝を深々とさし込むのです。(中略) 天から降る雨や大地から吸い上げる樹液によって養われる樹木も同じことで、樹皮の外側でこれを吸収するのではなく、内側にある管でこの養分を運ぶのです。ですから、植木職人も、梢に水をかけるのではなく根元にやるのがふつうです。(中略) ですから、青少年の形成者もこんな風に知識の樹根いいかえれば知性に最大の関心を払えば、活力は楽に樹幹つまり記憶力に流れて行き、やがて花や実、いいかえれば自由自在に言語を駆使する力と学習したことがらを実行する力とが現われてくるであります。」³⁰⁾

これについて梅根 悟は、「彼一流の自然界、動植物、そして機械器具、農耕、栽培、建築等の技術からの類推による形式が、(中略) 彼の方法論の真意をゆがめ、みずから誤解を招く結果になっている」とし、「これでは比喩、しかも甚だとっぴなこじつけ比喩でしかない。」³¹⁾と批判した。このほかコメニウスの言及には人間性の完成に天使の介在を不可欠と見なすなど、現代の私たちからすれば理解しがたい点が少なくない。もちろん、現代的な見地からコメニウスの叙述の非合理性を指摘することはあってよい。しかし、現代的な見地から過去のテクストを評価するだけでは、それは歴史

30) Comenius, *Didactica magna*. in *Opera Didactica Omnia* (hereafter *ODO*), Amsterdam, 1657, reprinted in Prag, 1957, Tomus I, pp. 76–73. このページ番号は1657年初版で打ち間違っているがそのままにしておく。鈴木秀勇・訳、『コメニウス「大教授学」』、明治図書、1962年、1、161–162頁参照。

31) 梅根 悟、『歴史を創った教師 コメニウス』、牧書店、1963年、111頁。

的理解とはならない。その意味で、コメニウスの一見非合理に思われる叙述をルネサンス以降に復興したヘルメス＝カバラ的伝統のなかで見直してみることは、コメニウスの新たな理解を可能にするものといえる。ヘルメス＝カバラ的伝統は新プラトン主義と関連しているが、そこではマクロコスモスとミクロコスモスの照応関係が強調され、人間は魔術や錬金術によって自然に働きかけることができると考えられていた。その際、自然を理解する方法が類比あったことは言うまでもない。また、新プラトン主義の神学思想は、五つの実体を認め、それを神－天使－霊－質－量という階層に序列化した³²⁾。そこで天使は神意の伝達者と見なされていた。こうした思想史的文脈においてコメニウスのテキストを読み直してみると、彼がこじつけとしか思えないようなメタファーを用いなければならなかった背景が浮かびあがってくる³³⁾。その意味で、イエイツのパーспекティブは、教育史叙述がともすれば陥ってしまいがちな近代主義的態度を相対化するために有効であると考えられる。

しかし他方、歴史的な因果関係をバラ十字団のような実在が疑われる結社やヘルメス＝カバラといった秘教的な原理に帰因させるというアプローチは、そこに帰因させた段階でそれ以上先に進んだ考察が不可能になるという危険を負っている。ちなみに秘教(mystery)の語源にあたるギリシア語 *myein* は「眼を閉じる」という意味である。もちろん、神秘主義思想の系譜を歴史的に理解しようというのであれば、彼女の見解を援用することには何らの問題もない。しかし、教育思想史において、彼女の視点を貫徹させてしまうと、それはどういう意味をもつだろうか。

たとえば、コメニウスを新プラトン主義の系譜に位置づけるならば、彼

32) 16世紀に再興した新プラトン主義については、田中仁彦が簡潔で明快に描いている(田中仁彦、『デカルトの旅／デカルトの夢——『方法序説』を読む——』、岩波書店、1989年。87－98頁。)

33) ドイツの文化哲学者シュプランガー(Eduard Spranger)はコメニウスを新プラトン主義の系譜においてとらえている(E.シュプランガー、長井和雄・村井実・訳、『文化と教育』、玉川大学出版会、1956年、50－52頁。)

の教育思想は一種の魔術的企てとしてとらえられることになる。なるほどそうした理解も、歴史的なひとつの解釈としては面白いものだろう。さらに、近代合理主義を批判しそれを超克しようという見地から、神秘主義思想に立脚した教育思想の歴史的意義を理解しようというのなら、それもひとつの試みとしてあってよいだろう。実際、人智学の提唱者シュタイナー(Rudolph Steiner)の思想は、社会の近代化がもたらした弊害に対するするどい批判となっており、彼の教育思想が現在にあっても根強い支持を受けているのは周知のとおりである。高橋 巖は、「コメニウス—アンドレーエーゲーテ (Johann Wolfgang von Goethe)—シュタイナーは近世ヨーロッパにおける『薔薇十字会』的な教育思想の系譜の中に位置づけられる精神の同族たちである。」³⁴⁾と述べている。このような立論が、綿密な論証を経てなされるのであれば、それはひとつの歴史的視点として興味深いものだろう。

しかし、教育思想と神秘主義との関連をあぶり出そうというでもなく、単にコメニウスと現代の距離をとり、近代主義的な理解を批判するというだけならば、そうした叙述がどういう意味をもつのか懐疑的にならざるを得ない。というのは、そうした叙述がコメニウスと現代との歴史的な距離を単に強調することによって、すぐれて人間的な問題である教育という論点を曖昧にしてしまうと思われるからである。ゆえに、イエイツのような視点を近代主義的な歴史叙述に対するアンチテーゼとして安易に援用することには、とくに教育思想史においては慎重であるべきだと考える。

その意味で、何よりも注目が払われるべきことは、彼女自身の「宣言の布告から、現実的な何かが浮かびあがってきた」³⁵⁾という言及である。なるほど、フィクションでしかないバラ十字文書が歴史的現実インパクトを及ぼしたのはまぎれもない事実なのである。この「現実的な何か」に注目することによって、「眼を閉ざす」のではなく、神秘主義的な要素がどのように社会的に機能したのかを具体的に明らかにすることが期待されるので

34) 高橋 巖、『シュタイナー教育入門』、角川書店、1984年、77頁。

35) イエイツ前掲訳書、289頁。

ある。たとえば、ヘルメス＝カバラ的伝統における記憶術の意味などは、絵や図を用いた教授法の成立過程を検討するうえで避けて通れない視点であるだろう。また、本稿がとりあげる、バラ十字思想における知識の共有と創造といった理念がもつ意味も、教育史における検討課題と見なすことができると思われる。

ハートリブ・サークルの成立前史をめぐって

ハートリブ・サークルがハートリブとデュアリの私的な発意から出発したことはすでに述べた。しかし、それは歴史的・社会的に何もないところから出発したものではない。実際、イエイツは、ハートリブ・サークルやコメニウスを広い意味におけるバラ十字運動に含めている。ここでは、彼女の言及およびハートリブ文書等から追跡できる範囲で、彼女の理解の妥当性を時代の推移に沿って概観しておこう。ただし、バラ十字団の実在が疑われる限り、ここでは一部のバラ十字文書の成立に関与したことだけははっきりしているアンドレーエとその周辺に注目するよりほかにはない。

すでに述べたように、コメニウスは1613年にハイデルベルク大学に入学している。ここには、ハートリブの兄弟ジョージ (George Hartlib) が神学を学んでいた。彼の入学からわずか12日後、ハイデルベルクはファルツ選帝侯の花嫁エリザベス・スチュアートを迎える³⁶⁾。コメニウスがその光景を眼にしていたことは疑いない。そして、ハイデルベルクでの修学を経てボヘミアに戻ったコメニウスが普遍的な知の体系の構築にとりくんでいることからして、彼がハイデルベルクでアンドレーエおよびバラ十字思想に触れる機会をもったと想像するのはさほど無理なことではない。

さて、アンドレーエは、1617年頃、宗教改革の進展と知的活動にとりくむ共同体の設立を考えるようになる。それは、キリスト教協会として1618年から20年にかけて存在していた³⁷⁾。この間、彼のユートピア小説『クリス

36) 前掲訳書, 226頁。

37) 前掲訳書, 204頁。

ティアノポリス』が発刊されている。ところで、この協会の実態は長い間うかがいしれなかったが、それを明らかにしたのがハートリブ文書である。ハートリブ文書には、キリスト教協会についての文書とその英訳が収められている。ハートリブは、1647年にホール（John Hall）という人物を雇い、アンドレーエのキリスト者協会に関する著作を翻訳させた³⁸⁾。それが、『キリスト教協会のモデル』（*A Modell of a Christian Society*, 1647）である。それによれば、協会は、戦争のために中断されたものの、ドイツのある君主の指導のもとにさまざまな分野の12名の研究者がいたと記されている³⁹⁾。

ところで、ハートリブは、30年戦争の少し前にアンティリア（Antilia）という協会が設立されたが、戦争のために中断したと述べている。アンティリアとは大西洋上にあるとされる伝説の島のことで、大航海時代の地図にも記されているという⁴⁰⁾。ハートリブによれば、アンティリアとはその協会のメンバーのみが用いることのできる割り符（tessera）であるという⁴¹⁾。コメニウスの浩瀚な伝記研究を著したブレカシュタット（Milada Blekastad）は、この協会がニュルンベルクにあったとしている⁴²⁾。

こうした知識人共同体の試みは30年戦争でついでに終わってしまうが、その直接のきっかけは、ボヘミアがフェルディナントの即位を認めず、ファルツ選帝侯を国王に選出したことによる。興味深いことに、1619年11月にフリートリヒの戴冠式が行われたとき、コメニウスはプラハ聖堂にいたとされる⁴³⁾。イエイツの図式にしたがえば、コメニウスはヘルメスの君主誕生の場

38) Charles Webster, *The Great Instauration. Science, Medicine and Reform 1626–1660*, Duckworth, London, 1975, p. 70.

39) イエイツ前掲訳書、217–218頁。

40) イエイツ前掲訳書、訳者註、404頁参照。

41) *HDC*, p. 73.

42) Milada Blekastad, *Comenius. Versuch eines Umrisses von Leben, Werk und Schicksal des Jan Amos Komenský*, Academia, Praha, 1969, S. 151.

43) Wilhelmus Rood, *Comenius and the Low Countries*, Van Gendt & Co, Amstersam, 1970, p. 28n4.

面に立ち会っていたということになる。しかし、その夢は30年戦争でうち砕かれてしまう。コメニウスは、逃避行のさなかで『地上の迷宮と魂の楽園』を著すが、そこでのバラ十字団への言及は失望と幻滅に満ちたものである。ちなみに、この書はアンドレーエの『異邦人の誤り』(*Peregrini errors*, 1618)から着想を得ている。

1620年代、知識人共同体の理想はさまざまなかたちをとって再興が試みられた。1622年には、ドイツ北部・ロストクで数学者ユンギウス (Joachim Jungius) が「エレウニス協会 (Societas Ereunetica)」を設立する。これは、ヨーロッパで初めての大学から独立した知識人サークルであったという⁴⁴⁾。ユンギウスもコメニウスやハートリブの文通リストに含まれる人物である。またアンドレーエは、1628年に戦争で中断したキリスト教協会をニュルンベルクに再興しようとした⁴⁵⁾。1628年、レスノに亡命して間もないコメニウスは、アンドレーエに書簡を送り、キリスト教協会の詳細を尋ね、両者の間には文通が交わされた⁴⁶⁾。キリスト教協会の再興に希望がもてないアンドレーエに対して、コメニウスは断念しないように訴え、キリスト教協会への参加を申し入れている。コメニウスのアンドレーエへの傾倒は、コメニウスがアンドレーエからの書簡を著作のなかで引用し⁴⁷⁾、『大教授学』を献呈していることにも示されるように、生涯にわたるものだった。イングランドに渡ったハートリブの周辺では、アンティリアがたびたび論議にのぼっている。ハートリブ文書での言及を総合すると、これはどうも二つの意味をもっていたらしい。それは、ひとつには理想の共同体を夢みる知識人たちの合言葉と見なされる。いまひとつは、理想の共同体にふさわしい土地を求めた植民計画であった。1629年の書簡には、アンティリアにふさわし

44) 種村季弘、「ヴァレンティン・アンドレーエと薔薇十字団」、アンドレーエ前掲訳書、340頁。Blekastad, *op. cit.*, S. 151.

45) イェイツ前掲訳書、221頁。

46) Blekastad, *op. cit.*, Ss.152-153.

47) Comenius, *Novissima linguarum methodus*. in *ODO*, II, pp. 283-284. 鈴木前掲訳書、2、180頁注38参照。

い場所が検討されており、アンティリアの信条と規則がイングランドのハートリブに送られたという言及がある⁴⁸⁾。この文書は見つかっていないが、イギリスの科学史家ウェブスター（Charles Webster）はアンドレーエのキリスト教協会に近いものであったと考えている⁴⁹⁾。また、植民計画が根も葉もないものでなかった証拠として、ハートリブらが一時北アメリカ・バージニアへの移住を考え、アンティリアをモデルにした植民地を検討した形跡がある⁵⁰⁾。

こうした植民計画は、イギリス内戦期のハートリブ・サークル関連の文書では姿を消す。内戦初期のハートリブ・サークルは、ユートピア構想が記された物語『マカリヤ』の議会提出に見られるように、イングランドに普遍主義的な変革の期待を寄せていた。ハートリブ文書には、1652年8月18日づけの『キリスト教協会協約』（*Christianae Societatis Pactum*）がある。これは9ヶ条からなる協約書でデュアリが起草して署名している⁵¹⁾。また、1653年のハートリブの『日誌』（*Ephemerides*）には、アンドレーエの『クリスティアノポリス』が新しい共和国の理念に近いので翻訳する必要があるとの記述がある⁵²⁾。これらの事実、は、アンドレーエの影響がハートリブ・サークルのなかで維持されていたことを示すものである。

一度、言及がなされなくなったアンティリアやマカリヤが再び触れられるようになるのはハートリブ晩年の1659年になってのことである⁵³⁾。これは、イギリス内戦の混迷が頂点に達し、王政復古を控えていた時期で、ハートリブの知識人共同体の構想は必ずしも彼の意図に沿うかたちで実現されていなかった。ハートリブは、普遍主義的な改革の精神を引き継ぐ団体を

48) *HDC*, p. 70.

49) Webster, *op. cit.*, p. 47.

50) Webster, *op. cit.*, p. 47. *HDC*, pp. 69–76.

51) *HP7/110/1A–2B*.

52) *HP28/2/57A*.

53) *HP60/4/60A–69B*. *HP60/4/131A–140B*. *HP60/4/111A–120B*. *HP8/9/12B*. *HP15/9/5B*.

構想し、それをアンティリアまたはマカリアの名で呼んだ⁵⁴⁾。この構想は、若き日に理想とされた知識人共同体とバミューダへの植民計画が混在した不思議な結末に終わっている。

このほかイエイツが注目するのは、化学者ボイル (Robert Boyle) のインヴィジブル・カレッジへの言及である。この「眼に見えない」という表現はバラ十字的である、と彼女は言う⁵⁵⁾。実際、ボイルの言及は、『バラ十字の名声』を意識したかともとれるものであり、彼女は王立協会をもバラ十字運動のうちにとらえようとする。たしかに、王立協会の創設にたずさわったメンバーのうちにはマリ (Robert Murray) のようにフリーメーソンとの関わりを指摘される人物もいる⁵⁶⁾。

17世紀ヨーロッパのさまざまな運動をバラ十字の名のもとに理解しようとするイエイツの構想力はまことに独創的で壮大なものである。概観してきたように、アンドレーエとコメニウス、アンドレーエとハートリブとの関係は明らかに指摘される。コメニウスは、キリスト教協会の理想を抱き続け、さらにアンドレーエの普遍的改革の理念がみずからの汎知学の原点であったとまで明言している。ハートリブとデュアリは、内戦期のイングランドで知識人共同体を実現しようとした。それは、アンドレーエのキリスト教協会から直接に、また、アンドレーエの影響を受けてバルト海沿岸で構想されたアンティリアを経て間接的に、それぞれ影響を受けたものであった。その意味で、バラ十字思想が30年戦争の勃発によってその現実化の可能性を失いながらも、ヨーロッパ17世紀中期にかけてさまざまなかたちをとって展開したというイエイツの立論にはかなりの説得力がある。

もちろん、彼女の視点にはさまざまな異論がある。たとえばウェブスターは、ヘルメス文書はアンドレーエやベーコンが掲げる基本的な道德観

54) Webster, *op. cit.*, p. 86.

55) イエイツ前掲訳書, 260頁。

56) 種村季弘, 「ヴァレンティン・アンドレーエと薔薇十字団」, アンドレーエ前掲訳書, 342頁。

と対立するとしている⁵⁷⁾。この理解に立つ限り、この時代におけるバラ十字思想のインパクトは評価されない。

しかし、こうした解釈論争の検討はここでの課題ではない。すでに引いたように、重要なことはバラ十字のインパクトが生み出した「現実的な何か」に注目することであろう。というのは、それによってハートリブやコメニウスに見られる思想の多義性を、単に合理主義的な見地からのみとらえたり、また逆に極端に非合理的にとらえてしまうことを避けられるからである。こうしたとらえ方がハートリブについて妥当だと思われるのは、彼がバラ十字団に対して慎重な評価を下しているからである。1640年の『日誌』には次のような記述がある。

「ハイン博士はバラ十字団 (Fratres Crucis Roseae) の始まりから終わりまでの全歴史を知っている。(中略) リッキウス (Riccius) が完全なものを手に入れようと約束してくれている。(中略) 彼らは、天使と霊の本性を知っていると偽ることによって、その他の神秘をも明かすことができたと自負している。そしてこの目的にしくじって、何も推進させなかったのだ。しかのみならず、彼らのうちの主演者は皆、ハイン博士自身が自殺しないように苦闘せねばならなかったように、こうした公共への嘘で世界をバカにしたという絶望によって苦境と良心の恐怖に陥ったのだ。(中略) いったん彼らの妄想が世界に開示され、勇敢なる文通を創設するためにそれを用いるよりよい方法が開示されるならば、それも価値があろう。」⁵⁸⁾

ここでバラ十字団との関係を指摘されているハイン (Heinrich Hein) という人物は、エレウニス協会を設立したユンギウスとは旧知の仲である。リッキウスという人物については分からない。しかしはっきりしているのは、ハートリブがバラ十字団に関心をもちながら、必ずしもそれを肯定的に受けいれていないということである。とくに、バラ十字文書をめぐる応酬が一種の流言飛語に終わってしまったのに対しては批判的である。しか

57) Webster, *op. cit.*, p. 329.

58) HP30/4/56B-57A.

し、すべてが否定されているわけではない。「勇敢なる文通を創設するため」にバラ十字の真相を知りたいと言うのである。ハートリブがバラ十字思想の何にひかれたのかは今や明らかである。彼の主たる関心は、『バラ十字の名声』の末尾で呼びかけられた「共同討議」の実現にあった。そして、共同討議の目的は明らかに知識の創造と共有にあった。

バラ十字団をめぐる謎は尽きない。その謎を探求することはたしかに興味深い作業である。しかし、教育思想史にとってより重要なのは、謎めいたバラ十字文書がもたらした帰結である。バラ十字文書のメッセージは、匿名の存在が、社会に潜在している私的な意見を顕在化させることを求めるという矛盾したものであったが、このメッセージに応じて、事実、ヨーロッパ17世紀の思想を特徴づけるさまざまな運動が族生したのである。そして、バラ十字団の匿名性というヴェールをとりさって、知の共有と創造を担おうとしたひとつの典型がハートリブ・サークルであった。

ハートリブ・サークルと王立協会

ハートリブ・サークルはイギリス内戦期に活発な活動を展開したが、ハートリブが1662年に死去したこともあり、1660年の王政復古をさかいに求心力を失っていった。それにとってかわって活発な活動を展開したのが王立協会である。王立協会は1660年11月から定期的な会合をもち、1662年7月に最初の勅許状を得て、「自然的知識の進歩のためのロンドン王立協会」という名称を得た。

王立協会の初期の活動的な会員としては、当時の指導的な数学者であったウォリス (John Wallis) やセント・ポール寺院等の建築で名高いレン (Christopher Wren) のほかに、ハートリブ・サークルにかかわったメンバーが数多くあげられる。内戦初期からハートリブ・サークルの活動的なメンバーで、コメニウスのイギリス訪問を出迎えたペル (John Pell) とハーク (Theodore Haak) はともに1663年に会員に選出されている。また、1647年頃からハートリブとかかわりがあったボイルとペティ、それにハートリ

ブが企てた学問振興機関の構想に名前があがっていた著名な日記作家のイーヴリン（John Evelyn）と英国教会の牧師ウィルキンズ（John Wilkins）も協会設立時からメンバーである。さらに学術雑誌の嚆矢とされる王立協会の会誌『フィロソフィカル・トランザクション（哲学紀要）』（*Philosophical Transactions*）を1665年に創刊した王立協会の初代の書記オルデンバーグ（Henry Oldenberg）は、デュアリの娘婿である。こうした人的なつながりは、ハートリブ・サークルと王立協会との関係を強く暗示するものである。ところが、ハートリブは協会創設に立ち会った12人のうちの一人でもなく、12名が推薦した35名の会員にも、1662年1月時点で会員に登録された100名のうちにも含まれていない⁵⁹⁾。また、王立協会の歴史を最初に著したスプラット（Thomas Sprat）が、協会の成立前史にあまり言及していないこともあって、王立協会とハートリブ・サークルの関係は科学史上のテーマであり続けている。

スプラットが王立協会の直接の起源としてあげているのは、1648年にオックスフォードのウォダム・カレッジで開かれた自然哲学や実験科学に関心をもった知識人の集いである。このグループのメンバーがのちに王立協会の中核になったことは事実である。他方、スプラットと同じく王立協会の設立当時からの会員のウォリスは、ハークが1645年に科学研究のための定期的な会合を持つように提案したと記している⁶⁰⁾。この会合は、ロンドンのグresham・カレッジを中心にもたれた。これは、1575年にロンドンに設けられた幾何学・天文学・医学・音楽の研究機関である。また、ウォリスの言及のややあとの1646年から47年にかけて、ボイルはインヴィジブル・カレッジ（見えない学院）に言及している。18世紀に王立協会の歴史を著したバーチ（Thomas Birch）は、ウォリスとハークとによる1645年のロンドンの会合とボイルの言うインヴィジブル・カレッジを同一視し、そ

59) Charles Webster, *Samuel Hartlib and the Advancement of Learning*, Cambridge University Press, Cambridge, 1970, p. 69.

60) Webster, *Great Instauration*, p. 54.

れを王立協会の起源であると考えた⁶¹⁾。

これに対してウェブスターは、バーチの見解をくつがえす解釈を提示する。彼は、ボイルが当初抱いていた発想とロンドンのグループの実験科学的な関心との間にはズレがあること、ボイルが1645年の時点ではロンドンのグループと面識がないことから、二つのグループは別個のものであったと主張する⁶²⁾。そして、ハートリブ・サークルとこれら二つの知識人共同体の推移を次のように解釈する。

ボイルの伝えるインヴィジブル・カレッジは、1646年の晩夏にさかのぼられる。ただし、このグループに関与したメンバーの居住地は離れており、定期的な会合は困難だったと思われる。そして、ボイルのインヴィジブル・カレッジは、1647年以降、ハートリブを中心とした学問振興機関の構想にボイルが関与していくなかで、そこに吸収されていったと見なされる⁶³⁾。

他方、1645年のロンドン・グループは、1648年に長老派が追放された際、独立派が実権を握った議会から信任を得たウォリスらがオックスフォードに移り、ロンドンとオックスフォードの二つのグループに分かれた⁶⁴⁾。ロンドンのグループは、1648年以降も主としてグresham・カレッジの教授たちによって維持され、のちにオックスフォードから移ってきた建築家のレンらを加えてクロムウェル (Oliver Cromwell) が死んだとき (1658年) にも存続していた⁶⁵⁾。ウェブスターは、これが王立協会の直接の起源ではないかと推測する一方、ここに介在した人物の多くがハートリブの関係者であることから、ハートリブ・サークルは王立協会成立のひとつのモデルであったと考えられるとした⁶⁶⁾。

両者の関係は興味深いテーマであるが、ハートリブ文書の詳細な研究に

61) Webster, *op. cit.*, pp. 57–58.

62) Webster, *op. cit.*, p. 58.

63) Webster, *op. cit.*, p. 72.

64) Webster, *op. cit.*, p. 57.

65) Webster, *op. cit.*, p. 93.

66) Webster, *op. cit.*, p. 99.

よっても十分に明らかにされていない。それよりも本稿にとって重要なのは、なぜハートリブ・サークルが王政復古とともに解消していったのかということである。というのは、そこにハートリブ・サークルの特質を理解する重要なポイントがあると考えられるからである。クロムウェルに率いられた共和政権は、高等教育機関の拡充への施策を講じ、アイルランド・ダブリンのトリニティー・カレッジの拡充⁶⁷⁾やイングランド北部ダラムで大学設立が検討された。このときハートリブは、評議員の一人に選ばれるが、おそらく病気のために辞退している⁶⁸⁾。ハートリブは1662年3月に死んでおり、晩年は病に苦しんでいた⁶⁹⁾。こうした事情が指摘されるものの、ハートリブと王立協会との間のある種の断絶を彼の健康問題に帰するのでは問題に答えたことにはならない。この問題の理解を複雑にしているのは、ハートリブ・サークルの政治への関与をどう理解するかという問題があるからである。

政治思想史や社会思想史のアプローチは、従来、イギリス内戦における政治闘争の側面を重視してきた。この見地に立つと、ハートリブ・サークルが1660年以降に求心力を失ったのは、復古王朝が、彼らを内戦期に議会派にくみした勢力と見なし、体制から排除したからであると理解されることになる。この理解は、ハートリブ・サークルを一定の政治的傾向をもった運動体と見なしている。実際、ハートリブやデュアリが長老派であったのか独立派であったのかについては、さまざまに考察が加えられてきた。ウェブスターは、デュアリが独立派に対して懐疑的である一方、ハートリブは独立派に好意的であったと指摘している⁷⁰⁾。また、ハートリブは、長老派が議会から追放されたのちに、不十分なものではあったが議会から公的給付をとりつけた。このことは、彼の政治的関与を示すものと見なされる。

67) Webster, *op. cit.*, pp. 225–233.

68) HDC, p. 21. Webster, *Samuel Hartlib and the Advancement of Learning*, p. 62.

69) HDC, p. 22.

70) Webster, *op. cit.*, p. 26.

ここで彼が、議会からの支持をとりつけたことは、科学研究への国家干渉を認める立場につらなる。

これに対して、王立協会は明確に異なった組織形態をとっている。王立協会は、周知のように、国王の公認である一方、その財政は会員からの会費でまかなわれていた。その意味で、基本的には自発的な組織なのである。ウェブスターは、王立協会がこうした組織形態をとった理由についても解釈を加えている。彼の研究によれば、ウォリスとハークによって創始された1645年のグループは、主として王党派からなる医師のグループと、議会派からなる数学者のグループに分けられるという⁷¹⁾。このようにあらかじめ政治的な対立を含んだ組織を存続させた知恵は、組織の目的を実験科学の研究に限定するということであった⁷²⁾。そして、このグループと王立協会の類似性が注目される。王立協会の成立に立ち会った12名は、1645年のグループと同じように議会派と王党派に半々に分けられるという。そして、協会の目的は政治的・宗教的なバイアスがとりのぞかれた「自然的知識の進歩のため」なのである。こうしてウェブスターは、「ハートリブの機関の運命が完全に政治的な展開にしばりつけられていたのに対して、グreshamでの活動は共和国の崩壊や王政復古に影響を受けなかった。」⁷³⁾ とする。この解釈にしたがう限り、ハートリブ・サークルはその政治的関与のために王政復古の過程で求心力を失ったと理解される。

しかしながら、こう理解することには少なからぬ問題がある。第一に、ハートリブ・サークルが独立派にくみしたという理解が妥当といえるかという問題がある。すでに述べたように、ハートリブは必ずしも彼と思想信条が一致しないと思われる人物とも交流していた。また、デュアリは、良心の自由には懐疑的で、独立派とは距離があったといわれるが、そうした彼が、独立派が実権を掌握したベアボーン議会に教育政策を提言している

71) Webster, *Great Instauration*, p. 55.

72) Webster, *op. cit.*, p. 61. p. 94.

73) Webster, *op. cit.*, p. 95.

のである。ウェブスター自身、「ハートリブの文通の当惑させられるほどの広がりから、彼が関与していた議会での支持者を抽出することは困難だ。同様に、支持者の社会階層や政治信条を一般化するのも困難だ。」⁷⁴⁾と述べている。また、チェコのコメニウス研究者のクンペラ（Jan Kumpera）も、「コメニウス派（引用者注：コメニウスとハートリブ、デュアリらのこと）の計画は、排他的な政治的意味で構成されていない。その実現は、特定の政治体制やイデオロギーに依存していない。」⁷⁵⁾としている。

第二に、ハートリブが議会からの支持をとりつけたとはいっても、それによって彼がいわゆる体制側の人間になったわけではないということが指摘される。ハートリブ・サークルの活動が議会からの一定の支持を受け、学問振興機関の具体化が図られた形跡はあるが、どれほどの活動をしたかは明らかではなく、彼がその活動目的に賛同していたかも疑問である。すでに見たように、彼は、知識人共同体のモデルの一つとしてアンティリアが念頭にあり、これにかなう組織を実現するという理想を抱き続けていた。死の前年の書簡で、彼は「アンティリア協会の希望は絶えてしまったが、その火は完全には消えていない。それはヨーロッパではないかもしれないが、時を得て燃え上がるだろう。」⁷⁶⁾と記している。彼が議会の要請に応じて学問振興機関に関与したにせよ、彼の意図はそこにとどまらなかったのである。

第三に、ハートリブと議会との親密性を強調しすぎるのもあまり妥当とはいえない。総じて、内戦期議会の教育への関与はハートリブ・サークルが教育改革に熱烈な関心を示したほどに前向きではなかった。「研究者たちの忍耐強い労苦にもかかわらず、空位期（引用者注：内戦期）の議会がそれ以前の時期の議会と異なって急進的に教育政策にとりくんだということ

74) Webster, *Samuel Hartlib and the Advancement of Learning*, p. 25.

75) Jan Kumpera, *Jan Amos Comenius and the English Bourgeois Revolution*. in *Acta Comeniana*, 28-1, Praha, 1979, p. 37.

76) Cf. *HDC*, p. 73.

は証明できなかった。』⁷⁷⁾ また、ハートリブは、政府機関によって文通を検閲され、嫌疑をかけられていた⁷⁸⁾。こうした嫌疑をかけられるのは、彼がさまざまな提言をとおして政治的インパクトを与えた点では政治にとって有益と見なされる一方で、彼の意図が体制の政治的意図に包摂され尽くさない特質をはらんでいるからにほかならない。

そして、その特質こそが、王政復古の過程でハートリブ・サークルにかわって王立協会を台頭させた主要な原因と見なされよう。それは、ハートリブ・サークルの掲げていた普遍主義的な理念にほかならない。すなわち、普遍主義的な理念に立脚するがゆえに、彼らは政治への関与をタブーとせず、むしろ政治に関与しなければならなかったのである。しかし彼らの関与は、何よりもその理念の実現のためであって、政治活動がその本来の目的なのではない。ゆえに、彼らの政治選択は、政治状況によって常に変動し、それはしばしば日和見主義と見なされたのである。その意味で、彼らの政治活動は手段であって目的ではなかった。彼らは、教育改革を包括した知の変革を機軸としながら、政治と宗教の改革を視野に入れていたのである。

ハートリブ・サークルの特質は、王立協会と比べるといっそう明らかである。王立協会は、その形成過程で政治的・宗教的問題を回避するという体質を身につけていた。活動財源を会費に頼るというのも、組織を政府による統制から免れさせる賢明な方法であった。しかし、ここで王立協会はみずからにひとつの制限をかけることになる。「王立協会は国家の規制を免れたが、普遍学振興機関の人道主義的でユートピア主義的な要素の大半を失った。』⁷⁹⁾ 王立協会は政治的に中立で政治的・宗教的価値判断から自由な組織を標榜していた。王立協会に勅許状を交付したチャールズⅡ世は、1662年に礼拝統一法、64年に集会法を制定して、非国教徒に苛烈な弾圧を加え

77) Webster, *op. cit.*, p. 67.

78) Webster, *op. cit.*, p. 69.

79) Webster, *Great Instauration*, p. 97.

ていた。こうした政治状況にあつて、王立協会が政治的中立を選択し、自然科学研究に専念していったのは不可避のことでもあった。

1668年、コメニウスはイギリス滞在時に著していた『光の道』(*Via Lucis*)に長文の献辞をつけ王立協会に献呈した。彼はここで、内戦期にハートリブやデュアリと協働した理念を高らかに繰り返す。彼は、汎知学が「人間に関するあらゆることがらの、あらゆる人における、あらゆる面における改善」という「目的の普遍性」を標榜し、学問・宗教・政治の変革を可能にすると訴える⁸⁰⁾。その献辞は、あくまでも謙虚でありながら、神学問題と哲学問題を避け自然科学の研究にみずからを限定していく王立協会への痛烈な皮肉に満ちている。

「皆さんは、この（引用者注：自然科学研究の）準備全体によっても神の知恵の始まりを手にしただけであり、人間の知恵をいつか最高へと上昇させる基礎を据えたにすぎないということを知らなければなりません。もしこれに安心してしまい、この基礎の上に何かを立てることを提案しなければ、塔を建てはじめて完成できなかった福音書の男（ルカによる福音書14）と同じだと嘲笑されるでしょう。（中略）地上では天でも維持される学問を学ぶのがよいのは明らかではないでしょうか。（中略）それだからといって私は、皆さんが行った仕事を軽視しているのではありません。（中略）自然の真理は、道徳的真理と霊的真理の準備をしているのは疑いありません。そこでお願いします。自然の領域で真理の秘義を受けている皆さんには、力強く前進していただきたい。むなしく、脆弱で、表面的で、虚偽に満ちた、無用の些細な哲学で人類を失望させないで下さい。（中略）『論争的な哲学は、論争的な神学を引き起こす』と述べた人は正しいことを述べたのです。それゆえに、政治について端的に言えば、現在の世界を支配している政治家が依拠している大部分は、滑りやすく、全体に不安定であり、崩壊へと

80) Comenius, *Via Lucis. in Opera Omnia Jan Amos Komensky*, 14, Praha, 1974, pp. 286–287.

至る真の原因であると言わざるを得ません。』⁸¹⁾

『光の道』が献呈される前年に著された『王立協会の歴史』(*History of the Royal Society*, 1667)で、王立協会の指導的メンバーであるスプラットは、その成立前史を詳しくあつかうのを避けた。それは『光の道』の献辞を読めば驚くにはあたらない。政治的に中立で価値判断から自由な自然科学研究を選択した彼らとしては、みずからがコメニウスのような普遍主義をひとつの起源として生み出されたとは認めたくはなかったに違いないのである。ハートリブ・サークルが、王政復古へのプロセスで王立協会にその役割を譲ったのは、イギリス内戦下の政治に親和的なイデオロギーを標榜していたからではなく、普遍主義的変革を掲げていたことによるのである。ハートリブ・サークルと王立協会の間の相違は、政治的なものと非政治的なものとの違いではない。党派性にくくられないという点では、ハートリブ・サークルもまた非政治的なのである。両者の違いは、ハートリブ・サークルが政治への参画を不可避とする普遍主義を標榜していたのに対し、王立協会が政治と距離をおくために政治的中立性を選択したところに認められるのである。王政復古は宗教改革の壮大な実験を終結させ、王立協会は学問研究から政治性と宗教性を除外した。二つの側面に通底するのは急激な信仰復興に対する揺りもどしという17世紀後期の基調である。それは、「あらゆる人に、あらゆることを、あらゆる側面から」という理念を凍結したのである。

II. 啓発の共同体

ハートリブ・サークルに先立つバラ十字思想、そしてハートリブ・サークルに代わって台頭した王立協会と関連づけることによって、ハートリブ・サークルの特質が浮かびあがってくる。彼らは、匿名性をとりさって公共の論議に参画した点でバラ十字の秘匿的なイメージから画される。他方で

81) *op. cit.*, pp. 290–291.

彼らは学問に限らず政治や宗教の改革を俎上にあげる点で王立協会に見られる没価値的——その意味で近代的な——知識人共同体からも画されている。そして、そうした独自性をもった彼らがさまざまな教育思想の母胎であったのである。そこには、「あらゆること」を討議の俎上にあげるというバラ十字文書の共同討議の理念が反映されていると想像されるが、彼らのそうした理念の内実はどのようなものであったのだろうか。

共同討議とはいわばコミュニケーションのあり方である。そして、コミュニケーションを維持するためには、そこには一種の規範が自覚的にせよ暗黙のうちにせよ前提とされていたはずである。ここでは、その一端を明らかにするため、彼らの文通のうちでコミュニケーションに関連する語の使用傾向を検討することにした。さいわい、ハートリブ文書はCD-ROM化されているので、ある語がどこでどれだけ用いられているのかを網羅的に把握することができる。もっとも、ハートリブ・サークルの文通はハートリブ文書にすべて収められているわけではなく各所に散在し、散逸もしているので、完全な網羅というわけにはいかない。しかし、一定の制限のもとで、彼らのコミュニケーションの特質を把握することはできるだろう。ハートリブ文書のCD-ROMは、ハートリブ文書を5,229のファイルに分割している。基本的に1文書が1ファイルであるが、ハートリブの『日誌』などの長い文書は複数に分割されて、この数になっている。

たとえば、communicate という語は498のファイルで使用されている。Communication は、聖体拝領 (communion) といった宗教的な意味との関連で用いられる一方で、ハートリブ文書では、今日的な情報の伝達という意味でも用いられている⁸²⁾。しかしながら、ここからハートリブ・サークルがコミュニケーションを重視したなどと立論してもあまり意味はない。というのは、コミュニケーション (伝達) といった中立的な意味合いの語に注目しても、彼らのコミュニケーションの特質は浮かび上がってこないか

82) Cf. Dury to [Borthwick], *Copy Letter in Hand?*, 25 September 1642, HP2/9/27a.

らである。そこで、はっきりとした価値的な意味を含む instill (主義・感情などをそそぎ込む) の使用傾向を見てみる。すると、全文書中での使用はわずか 7 回にとどまる。具体的に文脈を追ってみると、この語はサークル外の他者を対象にして用いられており、サークル内のコミュニケーションの意味づけには用いられていない。このようにして、いくつかの語を同様の方法で検討していった結果、綴りのバリエーション、語形変化、派生語を含めて、啓発 (edification) という語が頻出していることが明らかとなった。たとえば、edification は 161、語形変化や派生語を含めると 200 以上のファイルで用いられている。これは communication が中立的な語義をもっているのと比較してもかなりの頻度である。さらにこの語のラテン語である aedificio は 70 近い語形変化や綴りのバリエーションで用いられているが、aedificationem だけでも 91 のファイルに登場する。なぜ、この語がこれほどまでに頻繁に用いられているのか、以下、ハートリブ文書におけるこの語の用法を見ていく。

教育概念としての啓発

啓発という語彙は、この語を用いる典拠として、聖書の第一コリントの「すべてのことは、してもよいのです。しかし、すべてのことが徳を高める (edify) とはかぎりません。」(10:23) が頻繁に引かれていることから明らかなように、宗教的な意味合いを帯びている。このため、たとえば、諸教会間の対立にあたって問題となっていた教会統治の方法をめぐる、「聖徒の交わりをとおした相互啓発」⁸³⁾ などと言われるように、啓発は人間と神との関係においてとらえられている。

しかし他方、啓発は、人間どうしの合意形成と紛争解決の指標として用

83) Dury, *Copy Tract on Church Government in Scribal Hand?*, 27 December 1641, HP 68/9/1a-1b. このほか、宗教的意味での edification の使用としては、Dury to [Sir John Temple?], *Copy Letter in Hand?*, 28 September 1641, HP 9/1/141a-144b. 等がある。

いられている。16世紀宗教改革以降の宗教的信念の分裂と相克に直面して、ハートリブ・サークルが教会平和運動にとりくむ際、異なった意見を持つ者どうしがいかに和解しうるかは避けて通れない問題であった。デュアリは、「もし私たちの分裂と不和がいたるところで続き拡大すると、私たち自身の善のために相互啓発の方途によってお互いを理解することができません。」⁸⁴⁾、「植えつけられた種が熟すると、悲痛と暴力を生み出し、蔵が開かれたときには、そのなかには、不正という武器以外は何も見いだされず、そこでは、万人の啓発という善よりもむしろ浪費と破壊のためにあらゆる方途を講ずるようになる。」⁸⁵⁾と、人間相互の啓発が困難である状況を指摘する。ゆえに彼は、「討論 (debate) に関しては、皆が他者の不正に苛立たせられて、自身の身の証を立てるために骨を折る。」⁸⁶⁾と述べているように、個人的な確信に基づく無条件な論議には楽観的ではあり得なかった。

そこで、キリスト者としての自由の意義を、デュアリは、「啓発」という視点からとらえなおし、「他者の繁栄という目的のために私たちの意志を放棄しようとは堪え忍ぶ競争のうちで、合法的な自由と他者の啓発とは和解する。」⁸⁷⁾と述べることになる。そして、「使徒は慈善が啓発すると言った。それは真理であり、日常の経験から認められる。慈善なくしては相互の取引や相互に伝達可能な良き事物の増進のための基盤が確立されることはない。」⁸⁸⁾、「あらゆるものごとは、啓発のためになされるべきであり、何ごととも他のことに属することがらのためになされるべきではない。」⁸⁹⁾と、啓発

84) Dury to Andrew Ramsey, *Copy Letter in Hand* ?, 21 March 1642, HP 6/4/126a.

85) Dury, *Copy Epistle on Peace Unity & Charity in Hand* ?, Undated, HP 17/17/3b.

86) Dury to Dorothy Moore, *Copy Letter in Scribal Hand* ?, 28 April 1644, HP 3/2/19a-19b.

87) Dury, *Copy Letter on Images in Scribal Hand* ?, 24 February 1637 [1638?], HP 68/5/9b.

88) Dury, *Tract on Admitting Jews to a Christian Commonwealth*, Undated, HP 68/8/2a.

89) Dury to [Sir John Temple?], *Copy Letter in Hand* ?, 12 October 1641, HP 9/114/5b.

は、あらゆる活動の目的と見なされるようになる。デュアリの盟友ハートリブが、「家庭と教会と国政の規律が、改革の唯一の手段として真に復興せられるべきである。これはほとんど無視され、非常に腐敗し、わけでも家庭の規律はまったく衰え、万人はここで憎しみあい、虐げられている。」⁹⁰⁾ と、社会の総体的変革の必要性を訴えるのは、同じ趣旨においてであった。

さて、啓発という彼らの活動理念は、具体的にどのように展開されたのだろうか。彼らは、単にプロテスタント教派間の和解にとどまらず、多分に相手側の改宗を意図したものではあったが⁹¹⁾、ユダヤとの和解のための活動を展開した⁹²⁾。ここから、異なった信念体系の者との対話が啓発の方法と見なされていたのを理解することができる。

さらに、啓発の方法として、より包括的には、「キリスト者の慈善と知識の蓄えによる啓発のために」⁹³⁾、「平和と学問という方途によるキリスト者の公共的啓発 (public Edification)」⁹⁴⁾ といった言及に見られるように、平和と学問の進展が考えられていた。とくに、学校の拡充と改革は、「人間的学問についての交渉の目的は、1. 学識者のあいだでヴェルラム卿による『学問の進歩』を実践に移し、2. 教授方法、語学、学問に関することと、あらゆる年齢と適性にわたる学生のために学校を整序しようとするコメニウスの企てに助力することであるべきである。」⁹⁵⁾ などと、改革の筆頭課題と見なされていた。

その意味で、啓発は、その方法として教育を不可欠とするものであった

90) Hartlib, *Ephemerides*, 1634 (late), HP29/2/49b.

91) Dury to Sir Thomas Roe, *Copy Letter in Hand*?, 12 June 1643, HP6/4/154b.

92) Dury, *Tract on Admitting Jews to a Christian Commonwealth*, Undated, HP68/8/1b.

93) Dury, *A Christian Vow*, Undated, HP68/2/2b.

94) Hartlib, *Ephemerides*, 1639, HP30/4/33b. 同趣旨の言及としては、Hartlib, *Ephemerides*, 1655 [January–February], HP29/5/7b. がある。

95) Dury?, *Copy Discourse in Hand*?, Undated, HP17/10/1a–20b.

が、ここで注目されるのは、啓発という語彙そのものが、教育的な意味で用いられているということである。たとえば、デュアリによると思われる書簡では、ハートリブの活動について言及して、「かなりの財産をもっていた彼が貧困に陥り苦しんでいるのは、貧しい亡命学者の救済と、生活と学識によって子どもたちの啓発のための敬虔で高潔な学校という無二の方法を実施したもののそれが失敗したためです。」⁹⁶⁾ とある。ハートリブは、1630年代初頭にイングランド南部のチチェスターで学校の経営を試みたものの、彼の企てはかなりの負債を残したのみで失敗した。書簡はそれに触れているわけであるが、ここでの「子どもたちの啓発」という表現は、啓発を教育とまったく同じ意味で用いていると理解される。

さらに、「啓発」という語彙は、その語源的背景を意識して用いられていた。デュアリは、「使徒パウロは、第一コリント第3章で、教会やその博士たちについて、教会を農業や建築物に比較し、博士たちを神の庭に苗を植え水をやるのに精を出す農夫、また、真の基礎の上に良き材料を正しく据えて家を建設する (Edify) 建築家と比較して述べている。」⁹⁷⁾ と記している。そもそも「啓発 (edification)」は、神殿、家、部屋などを意味する *aedes* と作るという意味の動詞 *facio* からなる *aedifico* を語源とし、本来は、「建築する」という意味をもっていた。より語源に即して言えば、外界と区別され、ある種の道徳的な理念を体現する空間を構築するという意味とも解されよう。そして、デュアリが引用するように、「建築」は、聖書で教育のメタファーとして用いられているのであり、デュアリはそれを意識して、「私たちと他者の魂を啓発 (edifie) するためには、同じ苦境にある私たちがある申し分のない段階に至るまで、私たちと他者がもっている恩寵を増進し拡大することである。さて、打ち立て (edifie)、築き上げる (build up) には、基盤からまずはじめ、立ち上げられるべき建物の基礎を置き、建物

96) Daniel Rhaetus [Dury] to ?, *Copy Letter in Hand* ?, 26 November 1635, HP3/4/39b.

97) *Copy Letter in Dury's Hand*, ? to ?, 4 November 1637, HP26/19/4b.

が完成するまでにそれに加えられる営為を示唆することである。』⁹⁸⁾ と、edification を二重の意味で用いている。ここからは、education や instruction とは別に、edification という教育概念の系譜があることが想像される。

この教育概念としての edification という理解については賛否両論が予想されよう。たとえば中内敏夫は、edification を「教化」と訳し、それが意図的で計画的な人づくりであることは認めつつも、オーソドックスな教育概念としては見ていない⁹⁹⁾。しかしながら、脱学校論などの提唱で知られる社会理論家イリイチ (Ivan Illich) は、中世の神学者・教育者であるサン＝ヴィクトルのユゴー (Hugo de Sancto Victoire) の『学習論』(*Didascalicon*)¹⁰⁰⁾ の読解を試みるなかで興味深い言及を行っている。イリイチは、ユゴーが「教師の役目を〈範例 *exemplum*〉と、それが引き起こす都市共同体全般における〈建造 *aedificatio*〉にあると」¹⁰¹⁾ しているのに注目する。ユゴーの言及は世俗外の修道院において世俗一般の教化が考察されたという歴史上の変曲点を示していると思なされるからである。edification の教育概念としての意味を歴史的に考察するのは、ここでの課題を越えている。しかし、教育概念をとらえる枠組みを広げることは、教育史認識の再構築のために意味のあることだと思われる。その際、edification は、ハートリブ・サークルの実例に照らしてもひとつの考察対象であると思われる。

いずれにしても、ハートリブ・サークルにおいて、その活動の目的が啓発と見なされており、それは方法において、そしてその内実において、教育的な意義を有していたと理解することができる。ここでは、啓発を具体的な文脈で用い、さらにその語義にまで言及しているデュアリを中心にと

98) *Partial Copy, Dury's Discourse on a Method of Spiritual Meditation*, c.1640?, HP26/4/5a.

99) 中内前掲書, 11頁。

100) 五百旗頭博治・荒井洋一・訳, 『サン＝ヴィクトル学派』, 中世思想原典集成, 9, 上智大学中世思想研究所・監修, 平凡社, 1996年。

101) I. イリイチ, 岡部佳世・訳, 『テキストのぶどう畑で』, 法政大学出版局, 1995年, 84および183頁。

りあげたが、これが単にデュアリのみならずハートリブ・サークルにおいて共有されていたことは、1642年3月、イギリス内戦下でハートリブ、デュアリ、コメニウスの3者で交わされた盟約に明らかである。

1641年9月、コメニウスは教育改革の期待を担ってイギリスを訪問するが、それからわずか1ヶ月後にアイルランドで戦乱が勃発した。その翌月には、チャールズ I 世 (Charles I) を弾劾する『大抗告』 (*Grand Remonstrance*) が採択され、国王と議会の対立は決定的となり、翌年1月、国王は内戦状態を宣言してロンドンを去った。これによって、ハートリブ・サークルの社会改革案を議会にアピールする目途は立たなくなってしまった。こうしてコメニウスはイギリスを去ることになるが、ハートリブ文書には、ハートリブ、デュアリ、コメニウスが1642年3月3/13日づけで署名したラテン語の盟約書が収められている (日付はユリウス暦／グレゴリオ暦で表示)。

冒頭には、「キリスト教の公共善の促進における相互啓発のため (*ad mutuam aedificationem*) のこの友愛の盟約状 (*Foederis fraterni tabulae*) は、敬虔にも神の御前に届いた。」とある。ハートリブ文書を発見し丹念な研究を残したターンプル (George Turnbull) によれば、この盟約状の本文はコメニウスの筆跡である。彼自身の手で、サークルの活動を支える理念である「相互啓発」とサークルの活動目的である「公共善」が、厳粛に守られるべき盟約として記されている。そして以下に盟約の10項目があげられている。それらは、①3人の目的は私的な利害ではなく公共的啓発の前進にあること、②教会平和・教育改革・真実の幸福の道を明らかにする学問研究によって、キリスト教の大義を復興させること、③神の恩寵を忘れないこと、④互いの同意を得ないことは行わず、何ごとも協議を経て行う、それができない場合は理由を知らせあう、⑤考えていることは包み隠さず話し合う、⑥一人だけの意見に固執せず、他者と協調すること、自分の意見が正しいと思うときは主張してもよい、その際に重要なのは祈りである、⑦心を合わせてことに当たること、⑧お互いに自由に忠告しあい、非難され

でも悪くとらないこと、⑨この盟約の主旨に賛同し志を同じくして署名する者以外にはこの趣旨を漏らさないこと、支持者に説明が必要な場合は例外とする、⑩その他必要なことがあれば合意の上で盟約に加えられること¹⁰²⁾である。コメニウスは1659年にデュアリに宛てた書簡で、この盟約の主旨を守っていると記している¹⁰³⁾。

一瞥しても明らかなように、この盟約にはハートリブ、デュアリ、コメニウスの3人の協働を可能にしていた交際のあり方が示されている。神への信仰が何よりも強調される一方で、私的な利害を去り、相互対等的な対話を心がけるというコミュニケーションの倫理がとりあげられているのである。ヨーロッパ17世紀中期の普遍主義的な教育思想を生み出した彼らのコミュニケーションはまた、相互啓発という教育的な性格を帯びていた。

啓発と啓蒙——ハートリブ・サークルの歴史的位置

さて、ハートリブ・サークルのコミュニケーションは啓発という概念に見られるように、それ自体教育的な性格を帯びていることが明らかとなった。ところで、これは教育思想の形成基盤として歴史的にどのように位置づけられるのだろうか。ここでは、18世紀啓蒙主義の読者共同体との関連で、とくにハートリブ・サークルの文通へのこだわりから考察しておく。彼らはサークルの活動についてこのように述べる。

「それで問題は、個々の作業をどのようにまとめられるのかということである。それらをどのように結びあわせてひとつにできるのか？ 望む者同士、助力を必要としている者同士が、どのように交流するのか？ 相互啓発のための便宜、合意、一致 (Correspondencie) がいかにしてもたらされ、

102) *HP7/109/1A-2B. HDC*, pp. 458-460.

この盟約状には、ラヴェ (Johannes Rave) とスコットランド・グラスゴーの哲学教師ハミルトン (William Hamilton) も署名に加わっている。ただし、ハミルトンはその10年後にハートリブ、デュアリとたもとを分かった (*HDC*, p. 363.)。

103) *HDC*, p. 364.

確実なものとされるか？ 明白な手段なくして、これはなされるか？ これまで別々で、お互いに知らなかった者が、調停機関なくして、自分たちで協力しあうことは可能か？ ある神聖な点、相互の一致のための中心点なくして、お互いの労苦を伝えることはできるか？」¹⁰⁴⁾

「もし、彼ら〔引用者註：宗教指導者〕が、かくして単に信仰を破壊し、何も築き上げないような書物を公表する以前に、ふさわしい人物が、穏健な論説によって、彼らの疑いを少なくともある種の一般的な合意に導くという目的のために、書簡という方途によって親しく協議するならば、以前よりも相互啓発がなされるという希望をもって、それらは学識者のあいだで考慮されることになるだろう。」¹⁰⁵⁾

彼らはここで、啓発の手段としての文通が果たす役割を高く評価しているのであるが、ハートリブ文書を見ると、いくつかの特質に気づかされる。

第一に、書簡というレベルを越え、論説ともいうべき大部の手稿が少なくないことが指摘される。手稿は、現代的な通念からすれば、活字出版物に比べて、著者の著者たるゆえん、著者指名制が曖昧であるとも考えられるが¹⁰⁶⁾、17世紀ヨーロッパにおいては、印刷出版は、王侯等の庇護を必要とし、その対極において検閲があったこと¹⁰⁷⁾を考えれば、この当時における書簡や手稿の価値を活字出版物より低く見ることは妥当ではない。

第二に、ハートリブ文書には、書簡の写本が多く収められていることがあげられる。これは、単に散逸を防ぐためではなく、知見の蓄積と第三者への提供のためだったが、こうした写本がとられるということは、特定の個人を指名して書かれるという書簡の秘匿性をすでに越え出ていることを

104) *Copy Memorandum Concerning Ecclesiastical Peace*, Undated, HP9/1/111b.

105) *Copy Letter in Dury's Hand*, ? to ?, 28 October 1637, HP26/19/1a.

106) R・シャルチエ、長谷川輝夫・訳、『書物の秩序』、ちくま学芸文庫、1996年、78－99頁。

107) シャルチエ前掲訳書、81－93頁。および Guglielmo Cavallo & Roger Chartier (ed.), Lydia G. Cochrane (trans.), *A History of Reading in the West*, Polity Press, Cambridge, 1999, p. 21.

示している。そこでの「読み手」は同時に「書き手」になることを求められ、それによって意見交換に参画することが期待されていた。これは、読解とともに筆記能力を十分に有していた知識人共同体であったから可能であったともいえるが、そこでは、テキストとしての手稿や書簡をめぐって作者と読者との間に対称的な関係が求められていたと見なすことができる。そして同時に、この手稿や書簡の回覧は、いまだ一定の限界があるとはいえ、私事性と公共性を橋渡しする手段としてとらえられていた。

第三に、ハートリブ文書には、書簡や手稿のみならず、多くの出版されたパンフレットが含まれているのが指摘される。これは文通へのこだわりと矛盾するようにも思われるが、それはハートリブ・サークルのメッセージは二重であったと考えることで理解できよう。すなわち、知識人共同体の枠内における意見交換と、それに基づいた公共性へのアピールという二つの局面があったと見なされる。この二重性を端的に示すのが彼らの社会理念である「公共善 (Publick good)」である。デュアリは『現在と未来の公共善に向けての提議』(*A Motion Tending to the Publick Good of this Age, and of Posteritie*, 1642) で公共善を次のように定義する。

「公共善とは、神の生命における万人の普遍的で私的な善 (the universall private good) にほかなりません。というのは、一部のみの要求に応えることは、たとえそれが多数、いや大半であろうとも、真に公共的とは見なされず、反対に、共通 (common) で万人に同様に、そして真に万人に行きわたるのが適切にも公共的と見なされるからです。そこで万人は、人間における神の生命であるところの相似た関心と相似た分別とをもつのです。というのは、神は万人に対して等しく、しかも万人におけるひとつの生命であり、万人は同様に神に心を寄せるように心がけることができ、心がけるべきだからなのです。」¹⁰⁸⁾

ハートリブ・サークルが展望していた公共性とは、政治的な多数派工作

108) Dury, *A Motion Tending to the Publick Good of this Age, and of Posteritie*, London, 1642, p. 6.

によって獲得されるものではない。それは対立する党派をあらかじめ敵と見なすゆえに、その活動は普遍的なものとは見なされないからである。しかしながら、私的な善はどのようにして同時に普遍的で公共的な善であり得るのだろうか。ここで彼らは信仰に依存せざるを得ない。それは、私的な行為が信仰をとおした倫理的方向づけによって私的利害から解放されると確信されていたからである。

ところで、このメッセージの二重性は、閉じた領域における意見交換が十分に保証されてはじめて成り立つものであり、ゆえに彼らは、文通のもつリアリティを重視せざるを得なかったのである。コメニウスが、「偏愛や貪欲がよい書物も悪い書物も不必要に増大させ、洪水のように氾濫させ、学校と才能を絶滅させている。以前は書物への渴望はたいそう大きかったが、今やうんざりするほどだ。そして書物を題名で買うような怠慢な人も生まれている。」¹⁰⁹⁾と述べるように、知識人レベルでは活字出版物はすでに稀少でも畏敬の念を抱かせるものでもなかった。ヨーロッパ17世紀の知の危機の背景には、単に政治的・宗教的な規範の混迷のみならず、活版印刷術の普及による知の氾濫という状況があった。このゆえに、知の再構築にあたっては、私的な論議が自由になされる閉じた領域としてのインフォーマルな知識人共同体が必要だったのである。その際文通は、思想にリアリティを与えるかけがえのない手段であった。この当時の書簡がもっていた重みを裏づける言及として、デカルトがメルセンヌ宛てた書簡がある。デカルトは、『第一哲学についての省察』(*Meditationes de Prima Philosophia*, 1641)を出版する際、本文とともに7人(初版では6人)の読者による反論とデカルト自身による答弁を付したが、それについてこう記している。

「私の『形而上学』に関して今後も起こりうる反論には、前に来しましたものに対してと同じく答えるように努めましょう。そしてそれらをそのままに、またそれがなされた順序に従って印刷させて、歴史的事実を保たせる

109) Comenius, *Panegesia*. in CC, I, p. 60.

のが最善の道だと存じます。歴史的事実のほうが、私が同じことを全部申し述べるような長たらしい談義よりも読む方の気に入るでしょう。』¹¹⁰⁾

デカルトはここで、書簡の往復が思想の歴史的事実となるという注目すべき言及を残している。これは、ハートリブ・サークルに限らず、17世紀ヨーロッパの知識人共同体において、文通が知識活動にリアリティをもたせる文化的実践として、いかに大きな意味をもっていたかを理解させるものであろう。彼らにとって文通は、多様な信念体系が共有される領域を生み出す方法であり、それはある種の理念を体現する空間を構築するという「啓発」の意義を反映するものであった。

さて、この文通のもつリアリティは、18世紀市民文学に大きな影響を及ぼしていく。イギリスの作家リチャードソン (Samuel Richardson) の書簡体文学『パメラ』 (*Pamela*, 1740) は大きな反響をもって迎えられ、それ以後、書簡体は周知のようにルソー (Jean-Jacques Rousseau) やゲーテによっても用いられ、近代市民文学のひとつの典型的な形式となる。フランスの文化史家シャルチエ (Roger Chartier) らによる読書の社会史的研究は、18世紀ヨーロッパにおいて、読者とテキストとの親密な関係が生じたことを指摘している。彼によれば、そのプロセスには二つの読書変容があった。

ひとつは、中世の修道院に由来する音読から黙読へという変化である¹¹¹⁾。周知のように音読は、修道僧の写本作成にとって欠かせないものだった。この習慣がすたれていくなかで黙読が普及していく。これは、テキストと読者との間にくつろいだ機敏な関係をもたらしものであった。いまひとつは、テキストの質的・量的普及による集中型から拡散型へ¹¹²⁾ という変化である。これは、聖書のような限られた数の書物が読まれていたところに、多様なジャンルの書物がもたらされるような変化をいう。この読書変容は、

110) Descartes à Mersenne, 21/4/1641. in *Œuvres de Descartes*, publiées par Charles Adam & Paul Tannery, Nouvelle présentation, Vrin, Paris, 1964–1973, III, p. 363.

111) シャルチエ・編、水林 章・泉 利明・露崎俊和・訳、『書物から読書へ』、みすず書房、1992年、96頁。

112) 前掲訳書、102頁。

「数多くの本を一对一の親密な関係の中で独り静かに読むというやり方」¹¹³⁾をもたらした。読書変容は、読者とテキストとの関係をくつろいだものにし、テキストへの畏敬の念を低めテキストを脱権威化させる役割を果たしたと見なされる。

ところが現実には、出版資本主義の台頭と出版語の定着によって、テキストは新たな権威となっていく。文化人類学者のアンダーソン（Benedict Anderson）が指摘するように、ラテン語等の教養語と地方俗語とが限られた階層や地域を基盤としていたのに対して、出版語は広い版図を確保した。それにあずかって大きな役割を果たしたのが「18世紀ヨーロッパにはじめて開化した二つの想像の様式」¹¹⁴⁾としての小説と新聞にほかならない。この二つの様式は、出版語の版図にナショナリズムの基盤としての均質な空間と均質な時間を創造した。その意味で、この歴史的局面において、市民文学に導入された書簡体は、その量的・質的普及によって脱権威化されたテキストを復権させる有効な手段であった見なすことができるかもしれない。作中書簡のリアリティ¹¹⁵⁾が「想像の共同体（Imagined Community）」を生み出したのだろうか。その意味では、17世紀知識人の文通は、近代市民文学が求めたリアリティの準拠点であったということになるだろう。

ところでこれは、テキストの量的・質的普及を背景とした啓蒙主義の読者共同体と、それに先立つイエイツの言う「早すぎた啓蒙主義」の知識人共同体との間のズレを露呈することにもなる。現代ドイツの哲学者ハーバーマス（Jürgen Habermas）は、その公共性の歴史的な理解において、18世紀の読書的公共性について、このように規定している。

「公権力の公共性の傘の下で非政治的形態の公共性が形成される。これが、

113) 前掲訳書、同頁。

114) B・アンダーソン、白石 隆・白石さや・訳、『想像の共同体——ナショナリズムの起源と流行——』、リプロポート、1987年、44頁。

115) 作中書簡が近代的市民にリアリティを持って受けとられた様態については、R・ダーントン、「ルソーを読む」（シャルチエ編前掲訳書、216–219頁。）が参考となる。

政治的機能を持つ公共性の前駆をなす文芸的公共性なのである。それはまだ、それ自身の内部で旋回する公共の論議の練習場であり、これは民間人が彼らの新しい私的存在の直接の経験についておこなう自己啓蒙の過程であった。」¹¹⁶⁾

ここでハーバーマスが念頭においているのは、具体的には18世紀のサロン、カフェ、パブ、読者サークル等である。それらは、「理性のみが権力を持つ」というモットーに示されるように、理性的能力を有した個人による理性的議論によって構成され、絶対主義の宮廷的公共性と市民的公共性を媒介する役割¹¹⁷⁾を担い、政治的公共性の萌芽¹¹⁸⁾と見なされる。

この公共性の歴史的理解に関して、17世紀の知識人共同体はどのように位置づけられるだろうか。ハーバーマスが文芸的公共性を取りあげる際、主たる関心はたしかに18世紀に注がれている。しかし彼は同時に、その端緒がすでに17世紀に見られることを示唆している。たとえば、ハートリブ・サークルがとりくんだ活動として一種の情報センターの役割を担うオフィス・オブ・アドレスの構想がある。これはフランスのルノド (Théophraste Renaudot) の構想に着想を得たものであるが、ルノドは1631年にパリで新聞を創刊している¹¹⁹⁾。これは、公共の論議の場が形成された端緒と見なされる。また、共和主義思想の書『オセアナ』 (*Oceana*, 1656) の著者である政治理論家ハリントン (James Harrington) が政治問題を論議するロータ・クラブを設けたのは1659年のことである¹²⁰⁾。ちなみにロータ・クラブにはペティも参加していた。これらの例はハートリブ・サークルの活動時期と符合しており、その意味で彼らは、文芸的公共性の萌芽期に位置づけられることになる。彼らはいかなる点で18世紀啓蒙主義と共通し、いかなる点

116) J・ハーバーマス、細谷貞雄・訳、『公共性の構造転換』、未来社、1973年、48頁。

117) 前掲訳書、49頁。

118) 前掲訳書、50頁。

119) 前掲訳書、33-34頁。

120) 前掲訳書、52頁。

で異なるのだろうか。

ハートリブ・サークルが、特定の政治的支持基盤をもたず、それ自身の内部で旋回する閉じた領域をもち、相互啓発を志向していた限り、それは、文芸的公共性の先駆的な形態と見なすことができる。イエイツがバラ十字団に関してファルツの宮廷を想像しているのとは対照的に、30年戦争やイギリス内戦に見られるように、ハートリブ・サークルは選択の余地なく政治的カオスのなかにあり、彼らの活動は非政治的でヴォランタリーな性格を帯びていた。

彼らは普遍主義を標榜する限りにおいて政治への関与を宿命づけられていたが、彼らの政治参加は普遍主義的理念を実現するための手段であり、政治参加それ自体が目的であったのではない。ところで、ヴォランタリーな性格という点では、すでに見たように王立協会も同じである。しかし、王立協会が王権の庇護を得る過程で政治的・宗教的問題を回避し、自然科学の研究に組織目的を限定した点は、ハートリブ・サークルの普遍主義的傾向と明確に区別される。王立協会は政治的中立性を掲げることで、そこでの論議が『フィロソフィカル・トランザクション』等を通じて公開されるのにもかかわらず、政治的公共性への発展にあらかじめ制限をかけているのである。これに対して、ハートリブ・サークルは普遍主義を標榜することで、政治への関与をあらかじめみずからに課することになる。その意味で、彼らのコミュニケーションは、「公共の論議の練習場」としての「自己啓蒙」に基礎をおく一方、公共的なアピールを継続的に試みるというように二重の様相を帯びる。ここに、ハーバーマスがフリーメーソン等について指摘した「弁証法的な性格」¹²¹⁾が見いだされる。ハートリブ・サークルにおいては、閉じた私的論議と開かれた公的論議が併存している。イエイツが「バラ十字」という形容詞を付した意義がここに明らかであろう。ハートリブ・サークルにあっては、普遍主義が標榜されているにもかかわらず、

121) 前掲訳書、55頁。

一種の秘密的なイメージをとまなう閉じた領域が確保されなければならなかったのである。

ゆえに、「啓発」と「啓蒙」は、ともに「公共の論議の練習場」として政治的公共性に発展する要素をもっている点で文芸的公共性というカテゴリーのうちで理解される。しかし、それにもかかわらずこれらは歴史的に連続した関係にはとらえられない。啓発の共同体は、啓蒙主義の読者共同体のような公開性の契機に欠けているのである。ゆえに、両者の差異は、秘密結社のような知識人共同体では「理性の公共性がまだ秘密保持に依存し」¹²²⁾ ていたためであると理解される。しかし、ハーバーマスは、そこでは理性がすでに存在しており、それがあらゆる既成秩序の支配関係を脅かす危険性をはらんでいたために、「公開されぬよう保護される必要があった」¹²³⁾ と理解している。彼の理解にしたがえば、啓蒙に先だつ知識人共同体の秘密結社的な性格は、外部からの介入に対して理性を守るための自衛手段であったということになる。

しかし、そう理解することは妥当であろうか。閉じた私的論議の領域のうちに理性は機能していたのだろうか。この問いに対するひとつの答えは、ハートリブ・サークルがみずからのコミュニケーションを相互啓発へと方向づけていた事実を示されている。すでに述べたように、啓発は宗教的決断の私事化が生んだ混迷に直面して、紛争解決の指標と見なされていた。ゆえに、啓蒙主義のように独我論的思惟に楽観的ではあり得なかった。というよりも、実態はむしろ逆であり、人間相互の啓発を可能にするような人間個々の内的思惟の形式を考察することが彼らの課題だったのである。デュアリはこのように記している。

「私が言いたいのは、私たちが私たち自身と他者の啓発のために善良で合法的なことがらを意図するように自分自身が動かされるのに気づくとき、神へのおそれのもとで、私たち自身を反省する正常な能力 (the ordinary fac-

122) 前掲訳書, 55頁。

123) 前掲訳書, 55頁。

ulty of reflecting) がどのように用いられるべきかが考察されなければならないということだ。」¹²⁴⁾「自分自身で啓発という結果に至り、それを他者に伝えられるような省察 (meditation) のために、いかなる指示と規則とが用いられるべきかということが、述べられるべきことからである。」¹²⁵⁾

これらの言及に明らかなように、人間認識の問題は、相互啓発、すなわちコミュニケーションの再構築という目的からとりくまれているのである。このように、相互啓発という枠のうちに人間認識をとらえようという方向は、理性能力を備えた個人の存在に立脚して人間関係を設定しようという啓蒙主義の前提とは対立している。啓発の共同体にあっては、人間認識を考察するにあたって人間認識をあらかじめ方向づける場が必要とされていたのであった。その場は、理性の自衛手段という消極的な役割を越えた教育的空間としての積極的な役割を期待されていたのである。ハートリブ・サークルにおける「啓発」概念に注目することで、イエイツが17世紀中期思想をいみじくも「バラ十字啓蒙」と呼んだ意味をとらえなおすことができる。ハートリブ・サークルに見られる啓発の共同体は、閉じた私的論議の空間を必要とする限り「バラ十字的」な秘匿性を帯びざるを得ない。ところが他方、普遍主義的理念を標榜し、政治・宗教・学問にかかわる総体的な変革にかかわるゆえに、同時に「啓蒙的」な性質を帯びているのである。18世紀啓蒙主義から画される「早すぎた啓蒙」の歴史的個性は、ハートリブ・サークルに即してこのように理解される。

むすびにかえて

コメニウスは、イングランド訪問後の後半生を、普遍主義的な学問体系としての汎知学の完成にささげ、未完に終わったその著書に *Consultatio Catholica* との表題を付した。*Consultaio* は、従来「勧告」と訳されてきた

124) Dury to Cheney Culpeper, *Copy Extract in Hand*?, Undated, HP1/4/10b.

125) *Partial Copy, Dury's Discourse on a Method of Spiritual Meditation*, c.1640?, HP26/4/9a.

が、Edification との関係からとらえるとき、少なくとも勧告と訳すことは妥当ではないと思われる。コメニウスは、Consultatio について、「ある望まれた、しかし困難を含んだことがらについて、それが求められるかどうか、どうやって見出せるか、いかにして容易に行うことができるかを、多くの人々の間で、友好的に思慮深く探求することである。」¹²⁶⁾ と述べているが、ここで Consultatio は、相互啓発と同じように、紛争解決の手段を意味している。太田光一は、Consultatio の訳語に「審議」をあてることを提案している¹²⁷⁾ が、相互啓発との類似性からすれば妥当であると思われる。

この「総審議 (Consultatio Catholica)」という理念について、ドイツのコメニウス研究者クンナ (Ulrich Kunna) は、「コミュニケーション的行為にとっての礎石」¹²⁸⁾ であると評価し、その現代的意義を強調している。コメニウスは『総審議』第1部の『汎覚醒』(Panegersia) で、審議の規則をこのように定めている。

「(1) 自分の願望を表明することは、誰にも禁じられてはならない。(2) 意見表明を、誰も制限されたり排斥されたりしてはならない。(3) すべての人の共通の合意なしには、何も決定されたり結論されたりしてはならない。」¹²⁹⁾

たしかにこの言及は、ハーバーマスがコミュニケーション的行為を成り立たせる理想的発話状況としてあげた諸条件に酷似している¹³⁰⁾。しかしな

126) Comenius, *Panegersia*. in CC, I, p. 86.

127) 太田光一、「『汎覚醒』の研究——コメニウスの『総勧告』研究ノート(その3)——」,『高知大学教育学部研究報告』,第1部第41号,1989年,146頁。梅根は訳語として「会議」をあてている(梅根前掲書,38頁。)

128) Kunna, *Das "Krebsgeschwur der Philosophie" Komenskys Auseinandersetzung mit dem Cartesianismus*, *Schriften zur Comeniusforschung*, Bd.19, Sankt Augustin, 1991, S. 266.

129) Comenius, *Panegersia*. in CC, I, p. 103.

130) Habermas, *Vorbereitende Bemerkungen zu einer Theorie der kommunikativen Kompetenz*. in Habermas & N. Luhman, *Theorie der Gesellschaft oder Sozialtechnologie: Was leistet die Systemforschung?*, Frankfurt a.M., 1971, Ss. 101-141.

がら、すでに見たように、相互啓発はそもそも理性主義的前提に立たないことで成立しており、それは「審議」についてもあてはまる。ハートリブやコメニウスのコミュニケーションの理念は、個人の理性的能力を前提とする啓蒙主義とは断絶しているのである。ゆえに、啓発や審議をコミュニケーション的行為の一起源として見なそうとするならば、近代的な理性概念そのものが批判的検討の対象とならざるを得ない。コミュニケーション的行為論が理性を自我の局面から対話の局面においてとらえなおしたことは、デュアリやコメニウスの理性に対する評価と響きあう。

1647年、イングランドではチャールズ I 世を逮捕した革命軍が今後の方針を討議するためにクロムウェルを議長に総評議会が持たれた（パトニー会議）。政治思想史研究においては、ここでの新たな政治体制の模索をめぐっての討論に近代デモクラシーの源泉をみる見解がある¹³¹⁾。ここでの討論は、ピューリタンの熱情に裏づけられたものである限り、純粹に理性的なものではない。しかし、他者との協同性よりも個人的な確信が優位に立っている点で、個人主義的な理性的言説へのつながりを予感させる。ところが、ここでの討論は、政治的混迷を収束させるのではなく拡大させてしまった。この事実は、個人的確信のみから出発する思惟の隘路を示している。

ハートリブ・サークルは、読者共同体の成長のなかで市民社会の理念が醸成される18世紀に先だって、私的な省察と公的な論議を媒介する空間を提供した。彼らが理性よりもコミュニケーション倫理を重視する点で、理性の啓蒙を課題とする見地からすれば、前近代的と見なされるかもしれない。しかしながら、彼らがおかれていた状況を見過ごすべきではない。彼らは、政治的・宗教的信念の分裂と相克に直面して、多様な信念体系の和解と共存を模索した。そして、啓蒙主義的な個人主義でもなく、中世的な共同体主義でもなく、人間相互の立場を承認することから出発したがゆえ

131) 大澤 麦・澁谷 浩・編訳、『デモクラシーにおける討論の生誕』、聖学院大学出版会、1999年、3－4頁。

に、とくに文通を手段としたコミュニケーションのリアリティを重視しなければならなかったのである。彼らの理性に対する限定的な評価は、コミュニケーションの再構築という積極的な関心に支えられていた。彼らの組織が公開性に欠け秘匿性のヴェールに包まれているように見えるのは、相互啓発を可能にする閉じられた空間が重視されていたからであった。しかしながら彼らは、閉じた私的論議の空間から公共社会に参画することができた。それを可能にしたのが彼らの掲げる普遍主義的な理念にほかならなかった。それは、信仰によって保証される限り非合理的と見なされるかもしれない。しかしそれが、私的な発意で出発した彼らに公共性への参画をうながしていた事実は無視されるべきではない。既成の政治的・宗教的秩序の崩壊のもとで、普遍主義は私的な発意によって担われなければならなかったのである。

〔付記〕本稿は、教育史学会第43回大会（1999年10月3日：北海道大学学術交流会館）での口頭発表に、その後の検討を加えて成稿したものである。発表時には、金子 茂教授（中央大学）から貴重な示唆をいただくことができた。厚くお礼申し上げたい。

また、本稿は1995－97年度広島修道大学調査研究「近代教育思想とデカルト哲学の連関についての基礎的研究」および文部省平成7年度奨励研究(A)「17世紀イギリスにおける科学革命と教育思想の連関についての基礎的研究」の研究成果の一部である。

Summary

An Aspect of the Intellectual Interrelation in Mid-Seventeenth Century Europe

——The Community of ‘Edification’ as the Social Basis of Educational Thought——

Shin'ichi SOHMA

The purpose of this thesis is to clarify the characteristic of communication in Hartlib circle, which took a favourable role for the advancement of educational thought in mid-seventeenth century Europe. They dealt with various themes such as ecclesiastical peace, education reform and the exchanges of scientific discoveries by conveying correspondence among the intellectuals of the age. Through their intellectual exchanges, some dozens of educational writings such as John Milton's, John Dury's and William Petty's appeared. Whilst Hartlib circle was influenced by the ideal within the Rosicrucian literature which Frances Yates paid attention, they did not attach themselves to a secret organization but took part in public activities. Confronted with the total disorder of the society, they aimed universal reform covering all the aspects of human things of all people (*res humanae*). Therefore, Hartlib circle observed a tolerant attitude which accepted the variety of opinions and the mutual independence among the members. This makes them a social basis of the intellectual activities of the age. Through the examination of the Hartlib papers which consist of thousands of letters, drafts and printed matters, it was clarified that they regarded the purpose of their own activities as mutual edification of themselves and others. Originally, the meaning of the word edification was

to build a specific space. It also got to mean mental or moral improvement. This symbolically shows that their activities to build an intellectual space themselves had an educational implication. As a social basis of educational thought, Hartlib circle maintained an educational way of communication.